みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中国周辺諸集団と現在の少数民族の歴史を理解するために：クリューコフ報告, 唐屹報告, 果洪昇報告に対するコメント

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐々木, 史郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001734

中国周辺諸集団と現在の少数民族の歴史を理解するために

クリューコフ報告，唐屹報告，果洪昇報告に対するコメント

佐々木　史郎

中国や旧ソ連など「多民族国家」を標榜し，国民を民族という枠組みでとらえようとしてきた国々における民族やエスニシティに関する議論を行う時，必ず前提とされていることがある。それは「民族」と称する集団あるいは範疇の実在を自明のものとしている点である。実はこれらの国々で，民族学あるいは民族誌学を専門とする人々と議論するときに覚える違和感はそこに由来することが多い。

中国の民族，エスニシティに関する理論は，基本的に旧ソ連，とりわけスターリン時代に形成された民族論と，その後に展開したエトノス論に負うところが大きい。スターリンの民族理論は旧ソ連の民族政策の骨格をなしたが，後に（スターリン批判以降）学界における影響力を失う。それに代わって登場したのがソ連流のエトノス論であった。それを担った理論民族学者にはYu. V. ブロムレイやL. グミリョフらがいる。彼らはエトノスの定義とその生成・発展・消滅の過程をどのように評価するのかについて大論戦を繰り広げたが，ともに共通していたのは，エトノスというものが人間個体の自然的，社会的環境に対する適応方法の一つとして，人類に普遍的に内在していることと，そのエトノスに支えられた民族が集団としての実体を持ち，生命体のように誕生，成長，老衰，死滅という過程を繰り返すと考えていたことであった。

中国の人類学者や民族学者の間でこのソ連流のエトノス論がどの程度受け入れられていたのかは，私には情報がないので確たることはいえないが，唐屹，果洪昇両氏の議論を見る限り，エトノス論と同様に，中国では民族という集団の実在が自明のものとされ，また時空を問わず普遍的に存在する（あるいは「存在した」）ものであるということが前提とされているようである。別の言い方をすれば，両氏ともに「民族」という術語，概念をきわめて広義にとらえ，中国の史書に登場する集団やカテゴリーにも当てはめているように思える。

私個人は中国の史書に登場する諸集団，例えば匈奴，鮮卑，突厥，あるいは契丹，女真などといったものが現代的な意味での民族であったとは考えてはいない。そのために，両氏のいうように史書に登場する諸集団を民族として，中国の漢民族と他の民族との関係を論ずることには違和感を覚える。さらに，それを前提として現代の少数民族の問題を議論するのは，あらぬ誤解を招くもとではないかとも考える。例えば，果洪昇氏は満洲民族（満族）について，明代から現在までの歴史を紹介しながら，彼らの民族としての歴史とその文化的な特質を論じているが，果たして明代の女真，ホンタイジ（清朝二代目皇

帝，太宗）が命名した満洲，そして現在の満族の三者が同じ意味での民族であったのかについては疑問が残る。

中国史の場合，歴代の正史類をはじめとする歴史文書類では，必ず中国世界内外の人々を，現在の民族に類するようなカテゴリーに分類するということが行われてきた。一つのカテゴリーに入れられた人々は一見，共通の文化的な特徴を持ち，独自の言語を話し，集団としての伝承も保持していることから，客観主義的な基準に従えば，民族のようにも見える。また，記述内容からみても集団として実体を持っていたと判断できるものも見られる。例えば，ホンタイジが命名した満洲（Manju）という集団も，17 世紀初期当時には，それまでの女真と呼ばれてきた人々がヌルハチ（清朝初代皇帝，太祖），ホンタイジの政権の下に集結し，八旗と呼ばれる軍事・社会組織に再編されることによって，現代的な意味での民族に凝集つつあったともいえる。

そのような事情があるだけに，中国史研究においては民族ということばを使うと，古代から現代まで一貫した説明が可能であるかのような錯覚を覚えてしまう。しかし，クリューコフ氏も指摘するように，民族の定義あるいは分類の基準は 1950 年代の「民族識別工作」の前後を比較しても，分類される人々の文化的特徴や形質的特徴に基づく客観主義的なものから，民族帰属意識を重視する主観的なものに変わってきており，長い中国の歴史の中で，被支配民の分類基準が不変だったとは考えられない。現代の中華人民共和国の民族分類が帰属意識重視の姿勢をとっている以上，それを軽視してきた王朝時代（1912 年以前）の住民分類を現在の民族と重ね合わせることには慎重であるべきである。清朝時代（17 世紀～20 世紀初頭）の満洲が「現代的な意味での民族」に近かったのではないかといえるのは，満洲が支配者として自前の文書記録を残し，自分たちがいかなる集団であり，いかなる文化を持ち，他の集団（漢族やモンゴル，チベットなど）とどのように違うのかなどについて詳しく語っているからである。つまり，現在重視される構成員の帰属意識を重視した定義にも何とか当てはめることができそうなのである。

しかし，自前の文書記録を残さず，自分たちの集団帰属意識や自文化の表象を後世に伝えることができなかった人々の場合には，中国の史書に記されている内容を，記述対象の人々の意識に沿って確認することはできない。そのために厳密にいえば，たとえ名称が同じでも，同じ土地に住んでいても，住民の社会的，文化的，そして人的な系譜がつながらないケースもしばしばある。例えば 8, 9 世紀にモンゴル高原を席巻した遊牧民回鶻（ウイグル）と現在のウイグル族，あるいは 17 世紀末からアムール川流域の毛皮貢納民として登場する赫哲（ヘジェ）と現在の赫哲族などを挙げることができる。しかし，これらのケースでも往々にして現在のウイグル族や赫哲族の歴史を語るとき，史書に登場する回鶻や赫哲が彼らの祖先として扱われてしまうことがある。

このような誤った歴史観を助長するような過去と現在の対比は，史書に登場する集団を現在の民族と同等のものと無前提にみなしていることに原因がある。ウイグル族にせ

よ赫哲族にせよその名称を冠するに至った経緯は非常に複雑である。それを一つ一つ解きほぐして初めて民族の歴史や地域の歴史を語ることができるのであり，史書に登場する同じ名称，あるいは類似の名称を持つ集団を単純に祖先をみなすようなことでは語れない。その複雑な経緯を解きほぐす鍵となるのが，集団やカテゴリーへの分類の基準である。それも文書の編者やデータを提出した調査者によってそれぞれ異なる。それをしっかりと見極めることが，中国史に登場する周辺諸集団の歴史を理解する上での第一歩であり，現在の「少数民族」と呼ばれる諸集団を理解する上でも大いに役に立つだろう。

総　　括